



空海と密教美術展

昨年の夏も過ぎた頃、東京国立博物館で「空海と密教美術展」を拝観しました。京都東寺の講堂伽藍に居並ぶ21体の中の約半分の仏像、嵯峨天皇・橘逸勢と並ぶ三筆と称せられる空海自身の真筆、両界曼荼羅（金剛界曼荼羅・胎藏界曼荼羅）を初めとする仏画や唐伝来の仏具の数々、そのほとんどが国宝・重文ばかりと、これほどの関係宝物が一堂に集められたこともなかったのではないかと思います。

残暑の厳しい炎天下、入場のために老若男女が列を作り、私のそばの婦人は博物館貸し出しの parasol をさしながら画集に目を落とし、その向こうの青年は熱心に空海の解説書に読み耽り、私は、あらためてこれほど多くの人たちがこの平安の仏教僧に関心を寄せる事実には深い感慨を覚えました。

純粋に宗教的な関心をもった人もいたでしょう、仏教への関心というよりも、むしろ書や仏画を鑑賞したいという人もいたでしょう、流行りのイベントに参加してみようという人もいたでしょう、パワースポットと見立てて、巨人空海の遺物の中に身をおき、オーラを感じたいという人もいたでしょう、しかし何れにせよ、その動機を促したものが空海の魅力にあったことは間違いないところです。

私は、日本精神史上最高の規模を誇る人物は、と問われれば、躊躇いなく弘法大師空海を挙げます。どうしてこのような多角的な、しかもそれぞれ異なる分野で頂点をなす才能が一人の人物に舞い降りたのか、不思議でならないほどです。

四国讃岐の出身ということなど断片的な事実は伝えられてはいるものの、二十代前半までは、どのような成長過程をたどったのか、ほとんどはっきりしたことは判らない人であるにも拘わらず、どこかで習ったのか、漢語や梵語（サンスクリット）を使いこなし、奇跡ともいえる八面六臂の活躍を繰りひろげました。それも、日本ばかりでなく、唐においてさえ。

24歳の若さで孔子の儒教・老子の道教・釈尊の仏教を比較し、その高低浅深を判釈した我が国初の比較思想書『三教指帰』を著すかと思えば、巧みな会話と文章力で唐の官僚達を感嘆させ、憲宗帝からは揮毫を求められ、書を長安の宮廷に掲げられと、エピソードには事欠きません。

特に、20年にわたって在唐するという事で政府の許可を得て、無名の私費留学生として遣唐使に加えてもらい、当時最新の仏教宗派であった真言密教の本山、長安の青龍寺を訪れるわけですが、その時のエピソードは、空海という人物の破格の器量を物語るにあまりあります。

当時の青龍寺で一身に尊敬を集めていたのは、弟子数千人をしたがえた恵果和尚でした。

ところが、この恵果は、日本から訪ねて来た見も知らずの青年僧をひと目見るなり、「長いこと待っていました。今日会うことができ大変よろこばしいことです。本当によかった。私の寿命も尽きようとしているのに、法を授けて伝えさせる人がまだおりません。早く本国に帰って、この教えを国家に奉呈し、天下に広めて、人びとの幸せを増すようにしなさい」と、弟子達が驚き、反対するにも拘わらず、真言密教の奥義を伝授し、多くの経典や仏画・仏具を与えて、入唐2年も経たずして、空海を日本に帰します。一人の人間同士の出会いの衝撃がその後の日本文化に与えた影響は計り知れず、事実空海は、後年「空虚な身で出かけて充実して帰り」来ることが出来たと述懐しています。

このあまりに早い帰国を政府は訝り、しばらく九州に止めおきますが、しかしその後の空海が官民挙げて尊崇を集めたことは、今に至る歴史の事実です。嵯峨帝からは兄のように慕われ、比叡山の天台宗座主、先輩格の官費留学生であった最澄からは低頭して教えを請われ、一般庶民の子弟に門戸を開放した日本初の私立学校綜芸種智院を開き、讃岐に大がかりな農業用水満濃池を造り、没した後、醍醐天皇から弘法大師の論を贈られ、日本各地に幾多のお大師さま信仰を生みと、その足跡は、枚挙にいとまがありません。

恐らく、空海のような人は、山中深く仏教道場を開くのも、都の大寺院を治めるのも、経典や文学を著すのも、書をするのも、学校を創るのも、社会事業を行うのも、みな、仏さまに望まれ、仏さまに促された活動と想っていたことでしょう。こうした人物が生まれたのは時代の為せる業か、人間が大きく育つのは何に起因するものか、教育というものの不思議を感じざるを得ません。現代は、当時とは比べられないほど豊かな情報にあずかった時代ですが、さて空海のような人物が生まれている気配はあるのでしょうか。

※「請求目録」『弘法大師空海全集』（第二巻）筑摩書房

※※「性霊集」『弘法大師空海全集』（第六巻）筑摩書房

[>前のページへ戻る](#)